

平成12年度
近世史料館秋季展

春風館文庫展

期間：平成12年9月26日(火)～11月26日(日)
場所：金沢市立玉川図書館 近世史料館 展示室



山岡鉄舟肖像

金沢市立玉川図書館近世史料館

はじめに

今年4月、金沢市泉野出町在住の村上康正氏から、江戸末～明治期の武道家として、また書道や禅などで著名であった山岡鉄舟の剣術関係を中心とした資料約1000点が、近世史料館に寄付された。

これらの資料は、鉄舟の弟子から剣術の教えを受けた村上氏が「春風館文庫」として収集したもので、内容は、剣術関係書のほか、漢籍、宗教書、海軍関係資料などから、防具、刀剣、写真まで多岐に及んでいる。中でも、鉄舟直筆の書や、携えていたと伝わる刀などは、特に貴重な資料と云える。

今回の展示では、寄付された資料の中から、無刀流を確立した剣術家としての山岡鉄舟の横顔や、剣術道場「春風館」の成り立ち、足跡を探る。

「春風館文庫」について

「春風館」とは明治15年（1882）に山岡鉄舟が開いた道場名であり、その語源は鎌倉円覚寺の開山仏光禅師の「電光影裏春風を斬る」に依るものである。村上氏の蔵書も鉄舟ゆかりの道場名にちなみ「春風館文庫」と名付けられた。

山岡鉄舟（1836～1888）

山岡鉄舟、通称は鉄太郎、諱は高歩（たかゆき）、字は猛虎・鉄舟・一楽斎など。幕臣小野朝右衛門の五男として生まれ、のち槍術の師山岡家を継ぎ山岡姓となる。妻は三舟（勝海舟・高橋泥舟・山岡鉄舟）と称されたうちの一人高橋泥舟の妹である。

以降、幕府講武所の剣術教授、浪士組取締役等を経て、徳川慶喜警固の精鋭隊頭をつとめ、駿府において西郷隆盛と会見し、江戸開城を決めた。

明治以降は茨城県参事、伊万里県令を歴任し、明治5年からは天皇側近として仕え、15年これを辞し、明治21年（1888）53歳で没した。

展示品解説

1 一刀流派 兵法秘伝書 鶴殿長快撰 文化10年(1813)

「一刀流兵法目録」、「流派系図」など一刀流の秘伝をまとめたもので、題箋には一子相伝と記されている。明治12年に山岡鉄舟が「観之」と奥書にあり、鶴殿長快の高弟井戸金蔵らをへて、無刀流に引き継がれた伝書である。

鶴殿長快は伊藤一刀斎から数えて13代目にあたり、享和2年(1802)師小野半左衛門尉貞雄より印可・弟子を譲り受けている。

2 小野次郎右衛門忠喜公しない打許すの達書 山岡鉄太郎写

天明7年(1787)、小野次郎右衛門が門弟中に対し、竹刀を用いた試合、稽古について達したもので、明治19年に山岡鉄舟が書き写している。

3 一刀流兵法目録 明治14年1月30日

山岡鉄舟が、師浅利又七郎義明から流派の免許を受けたもので、印可の内容が目録として記されている。

4 小野次郎右衛門忠明公免状 小野派一刀流二代 慶長10年(1605)

5 小野次郎右衛門忠常公書状 " 三代

6 小野忠弥忠久公書状 " 四代

小野一刀流歴代の書状。小野次郎右衛門忠明の書状は、流派の印可について大民部に宛たものである。

7 山岡鉄舟肖像

8 江戸開城和平交渉始末筆記

慶応4年(1868)、江戸を目指して東海道を上ってきた官軍に対し、徳川家の行く末を案じた鉄舟は、静岡に出向き、東征軍の大参謀西郷隆盛と面談し、将軍恭順の意志を伝え、江戸での勝海舟・西郷隆盛の江戸開城の会談へと導いた。

9 山岡鉄太郎先生真筆剣道書

明治16年から21年にかけて、山岡鉄舟の撰・写になる兵法書で、「神道無念流兵法伝書」・「葵正観世音菩薩縁起」・「新陰流兵法之目録」など5冊からなり、他に「一刀流兵法・二天一流兵法書」を加えて、山岡鉄舟剣法書の骨格をなすものとなっている。

10 鉄舟先生佩刀

銘 家吉、室町期以前の備前刀と伝えられている。二尺四寸二分の太刀で、山岡鉄舟が静岡において西郷隆盛と会見の際に帯用していたものと伝えられ、香川善治郎、草鹿龍之介をへて、村上康正氏に伝えられたものである。

11 字高歩命名書

鉄舟は、通称の鉄太郎の他に諱（本名）である高歩と、字としての鉄舟・一楽斎などを名乗った。本史料は、諱を定めたときの命名由来を記したものである。命名者は、小野高堅である。

12 鉄舟先生遺香 羽織

山岡鉄舟より香川善治郎に与えられたもので、無刀流相伝者の証となると共に、鉄舟の遺香を伝えるものである。

なお鉄舟は、身長6尺2寸、体重28貫という巨体であったと伝えられている。

13 山岡鉄太郎先生印譜

14 小野家伝来印

小野忠明より歴代使用の「梵字丸型鑄銅印」、小野忠常より歴代使用の「卍木印」、印文はタテに殺人刀、ヨコに活人剣とある。

15 山岡鉄太郎先生印譜 山本玄峰老師讃額

16 春風館掟 明治17年

他流試合は素面・木刀で行うこと、他流について修行している者は、竹刀・面・籠手使用のことと、二ヶ条につき定めている。

17 剣法三角矩

剣法の根本となる形であり、目・腹・剣先を結ぶ三角の位置を体得することが、無刀流を学ぶ初学第一の根元である、としている。

18 浅黄無地草摺胴

明暦年間（1655～57）に鉄舟の四代先の師となる中西忠蔵が、帯用したものと伝えられ、春風館においては、終日立切二百面試合の修了者と学頭のみが帯用できるものであった。

裏面に「無刀流印」、「立切式合之覚」の印が押されている。

19 二百面試合相済証

明治16年4月1日、香川善治郎が終日立切を完遂したことを記念して、羽目板に記して、その証としたものである。

二百面試合とは、1日に二百試合をこなし、それを7日間計千四百回の立合いをする難行である。

20 一刀流正伝無刀流稽古道具

面・胴・籠手のセットで、籠手については、香川善治郎使用のもので、昭和35年草鹿龍之介から石田和外へ、同じく昭和51年に石田から村上康正に贈られたものである。

21 大籠手

木刀を使用しての稽古に用いられるため、極めて頑丈な作りとなっており、竹刀使用の他流と異なる特長が防具にも見られる。

22 香川善治郎使用の木刀と竹刀

23 無刀流型写真

24 香川善治郎肖像

25 石川龍三肖像

26 草鹿龍之介肖像

27 石田和外肖像

山岡鉄舟略年譜

天保	七年（一八三六）	一歳	六月十日、御蔵奉行小野朝右衛門の四男として江戸本所に誕生。
弘化	元年（一八四四）	九歳	久須美閑適斎のもとで、柳生真影流の剣法を学ぶ。
	二年（一八四五）	十歳	父朝右衛門が飛騨郡代となり、父母と高山へ移る。
嘉永	三年（一八五〇）	十五歳	書家岩佐一亭に学び、「一楽斎」の号を授けられる。
	四年（一八五一）	十六歳	井上清虎より北辰一刀流を学ぶ。
	五年（一八五二）	十七歳	父、七十九歳で高山陣屋にて病没。江戸に戻る。
安政	二年（一八五五）	二十歳	講武所に入り、千葉周作に剣を学ぶ。山岡静山に槍術を学び、静山没後、山岡家の養子となり、静山の妹英子と結婚する。
	三年（一八五六）	二十一歳	剣術の技倆抜群のため講武所世話役になる。
	六年（一八五九）	二十四歳	尊皇攘夷党を結成し、清川八郎らと同盟を結ぶ。
文久	二年（一八六二）	二十七歳	浪士取締役になる。
	三年（一八六三）	二十八歳	将軍家茂の先供として上洛。この年、浅利又七郎に剣を学ぶ。
慶応	四年（一八六八）	三十三歳	徳川慶喜の旨を受け、静岡にて倒幕軍大参謀の西郷隆盛と会見。
明治	二年（一八六九）	三十四歳	静岡藩権大参事になる。
	四年（一八七一）	三十六歳	茨城県参事、伊万里県権令となる。
	五年（一八七二）	三十七歳	明治天皇の侍従となる。
	十年（一八七七）	四十二歳	宮内大書記官、宮内省内庭課長などを歴任。
	十一年（一八七八）	四十三歳	明治天皇の北陸・東海地方巡行に同行する。
	十三年（一八八〇）	四十五歳	一刀流正伝を継ぎ、無刀流を開く。
	十五年（一八八二）	四十七歳	元老院議員となる。剣術道場「春風館」を開く。
	十六年（一八八三）	四十八歳	東京都台東区谷中に禅宗寺院「全生庵」を建立する。
	二十年（一八八七）	五十二歳	子爵を授けられる。
	二十一年（一八八八）	五十三歳	六月二十一日、座禅のまま大往生を遂げる。勳二等に叙せられ、全生庵に埋葬された。

流派系図

伊藤一刀齋景久市 — 古藤田勘解由左衛門俊直

小野次郎右衛門忠明 — 伊藤典膳忠也

(忠也流祖)

小野次郎右衛門忠常

(小野派)

伊藤孫兵衛忠一

(水戸藩系)

小幡勘兵衛景憲

(甲州流兵学祖)

小野忠於 — 小野忠一

梶新右衛門正直

(梶派祖)

小野助九郎忠久

津輕土佐守信壽

中西忠太子定 — 同忠藏子武 — 同忠太子啓 — 同忠兵衛子正

(中西派祖)

中西忠太子受

浅利又七郎義信 — 千葉周作

(北辰一刀流祖)

浅利又七郎義明 — 山岡鉄太郎高步

(二刀正伝無刀流祖)

金沢門人

香川善次郎 — 石川龍三 — 草鹿龍之助 — 村上康正